

【 主日アポリティキオン 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ  
 信者 父 聖 神 共 始

なきことばわがすくいのため  
 言 吾 救 爲 に

どうていぢよよりうまれしものをほめうとうて  
 童 貞 女 生 者 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて  
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼりしをしをしのびそのこ  
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを  
 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまえばな  
 復 活 給 たり。

【 瞽者主日のコンダック 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき  
 光 榮 父 子 聖 神 歸

す、

ハリストスよ、われたましいのめのくらみたる  
 我 靈 目 夢

もの は、うまれながらのめしいのご  
 者 生 瞽 者 如

とく、なんぢにつきて、つうかいをもって  
 爾 就 痛 悔 以  
 よぶ、なんぢはくらやみにあるもの  
 呼 爾 黒 暗 在 者  
 のいたりてあきらかなるひかりなり。  
 至 明 光

【 パスハのコンダック 第8調 】

いまもいつもよよに、アミン。  
 今 何 時 世 世  
 しせざるハリストスかみよ、なんぢははかにく降  
 死 神 爾 墓 降  
 だれどもぢごくのちからをやぶり、か勝  
 地 獄 力 破 勝  
 つものとしてふくかつせり、けいこう香  
 者 復 活 携 香  
 ぢよによろこべよといい、なんぢのしとにへ平  
 女 慶 言 爾 使 徒 平  
 いあんをあたえ、ほろびしものにふく復  
 安 與 亡 者 復  
 かつをたまえり。  
 活 賜

【 聖三の歌 】

代禱) 主よ、敬虔なる者を救い、及び我等に聆き給え、

しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ  
 主 敬 虔 者 救 及 我  
 らにききたまえ。  
 等 聆 給

代禱) 世世に、

ア ミ ン。

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 憐  
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 なるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 憐  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 聖 勇 毅  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
 光 榮 父 子 聖 神  
 にきす、いまもいつもよよ世世に、アミン。  
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇  
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を  
 殺 聖 常 生 者 我 等  
 あ わ れ め よ 。  
 憐

【 提綱 (プロキメン) 第8調 】

代禱 <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>しゅなんぢら</sup> プロキメン、<sup>かみ</sup> 主 爾 等 <sup>ちかい</sup> の 神 に <sup>な</sup> 誓 <sup>つくの</sup> を 作 して 償 えよ、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つく の  
 主 爾 等 神 誓 作 償  
 え よ 、

誦經) <sup>かみ</sup> 神 は <sup>し</sup> イウデヤ に 知 ら れ、<sup>そのな</sup> 其 名 は <sup>おおい</sup> イズライリ に 大 な り、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つく の  
 主 爾 等 神 誓 作 償  
 え よ 、

誦經) <sup>しゅなんぢら</sup> 主 爾 等 <sup>かみ</sup> の 神 に

ち か い を な して つく の え よ 、  
 誓 作 償

【 使徒經 (アポストロス) 38 端 聖使徒行實 16 章 16～34 節 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしとこうじつ よみ</sup> 聖使徒行實の讀、

代禱) <sup>つし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>か ひ しとら きとう ところ ゆ とき うらない き よ ひとり しもめわれら あ</sup> 彼の日、使徒等が祈禱の所に適きし時、ト筮の鬼に憑らるる一の婢我等に遇えり、

<sup>うらない もつ そのしゅ おお り え もの かれ およ われら したが よ</sup>ト筮を以て其主に多くの利を得しめたる者なり。彼がパヴェル及び我等に從いて、呼び

<sup>い こ ひとびと しじょう かみ しよぼく われら すくい みち つた もの ひひさ</sup>て曰えり、此の人人は至上なる神の諸僕にして、我等に救の道を傳うる者なり。日久

<sup>これ おこな つい これ いと かえり き い われ</sup>しく之を行いに、パヴェル遂に之を厭い、顧みて鬼に謂えり、我イススハリストス

<sup>な もつ なんぢ かれ い めい きたちまちい しもめ しゅ そのり のぞみ むな</sup>の名を以て、爾に彼より出づるを命ず。鬼忽出でたり。婢の主は其利の望の空し

<sup>み とら いち つかさら まえ ひ すで じょうかん ひ</sup>くなりたるを見て、パヴェルとシラとを執えて、市に有司等の前に曳けり。既に上官に曳き

<sup>きた い こ ひとびと じん われら まち みだ われら じん う</sup>來りて曰えり、此の人人はイウデヤ人にして、我等の邑を擾し、我等 로마 人に受くべから

<sup>おこな れい つた たみ またひと た かれら せ じょうかん かれら ころも</sup>ず行ふべからざる例を傳う。民も亦齊しく起ちて、彼等を攻め、上官は彼等の衣を

<sup>は めい かれら むち おお むち のち ひとや くだ ごくり かた かれら まも</sup>褫ぎ、命じて彼等を杖うたしめたり。多く杖うちて後、獄に下し、獄吏に固く彼等を守

<sup>めい ごくりか ごと めい う かれら ないごく くだ そのあし かせ くわ</sup>らんことを命ぜり。獄吏是くの如き命を受けて、彼等を内獄に下し、其足に梏を加え

<sup>やはん ころおい およ きとう かみ さんえい めしうどこれ き にわか</sup>たり。夜半の頃、パヴェル及びシラ祈禱して、神を讚榮せり、囚者之を聞けり。俄

<sup>おおい ぢしん ひとや もというご しよもんみなたちまちひら かくじん かせ と ごく</sup>に大なる地震ありて、獄の基動き、諸門皆忽啓け、各人の械は解けたり。獄

<sup>りさ ひとや しよもん ひら み めしうどに おも かたな ぬ じさつ ほつ</sup>吏醒めて、獄の諸門の啓けたるを見て、囚者逃げたりと意い、刀を抜きて自殺せんと欲

<sup>しか おおい こえ もつ よ い みづか そこな なか けだしわれらみなここ</sup>せり。然れどもパヴェル大なる聲を以て呼びて曰えり、自ら戕う勿れ、蓋我等皆此

<sup>あ かれあかり もと おど い おのの およ まえ ふふく かれら そと</sup>に在り。彼火を求めて、躍り入り、戦きてパヴェル及びシラの前に俯伏し、彼等を外

<sup>みちび いだ い きみ われなに な すくい う かれらい しゅ</sup>に導き出して曰えり、君よ、我何を爲して、救を得べきか。彼等曰えり、主イススハ

<sup>しん しか なんぢおよ なんぢ ぜんかすくい え すなわちしゅ ことば かれおよ およ</sup>リストスを信ぜよ、然らば爾及び爾の全家救を得ん。乃主の言を彼及び凡そ

<sup>そのいえ あ もの つた かれ よ そのとき かれら と そのきず あら ただち みづか その</sup>其家に在る者に傳えたり。彼は夜の即時に彼等を取りて、其傷を濯い、直に自ら其

<sup>ぜんかぞく せん う つい かれら ひ おのれ いえ い しよくぜん そな ぜんか とも</sup>全家族と洗を受けたり。遂に彼等を引きて、己の家に入れ、食膳を具え、全家と偕

<sup>かみ しん こと よろこ</sup>に神を信ぜし事を喜べり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 使徒たちが、祈り場に行く途中、占いの霊につかれた女奴隷に出会った。彼女は占いをし、その主人たちに多くの利益を得させていた者である。この女が、パウロやわたしたちのあとを追ってきては、「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」と、叫び出すのであった。そして、そんなことを幾日間もつづけていた。パウロは困りはてて、その霊にむかい「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行け」と言った。すると、その瞬間に霊が女から出て行った。彼女の主人たちは、自分らの利益を得る望みが絶えたのを見て、パウロとシラスとを捕え、役人に引き渡すため広場に引きずって行った。それから、ふたりを長官たちの前に引き出して訴えた、「この人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、わたしたちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しているのです」。群衆もいっせいに立って、ふたりを責めたので、長官たちはふたりの上着をはぎ取り、むちで打つことを命じた。それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。獄吏はこの厳命を受けたので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかりとかけておいた。真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいていた。ところが突然、大地震が起って、獄の土台が揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、みんなの者の鎖が解けてしまった。獄吏は目をさまし、獄の戸が開いてしまっているのを見て、囚人たちが逃げ出したものと思い、つるぎを抜いて自殺しかけた。そこでパウロは大声をあげて言った、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」。すると、獄吏は、あかりを手に入れた上、獄に駆け込んできて、おののきながらパウロとシラスの前にひれ伏した。それから、ふたりを外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」。ふたりが言った、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」。それから、彼とその家族一同とに、神の言を語って聞かせた。彼は真夜中にもかかわらず、ふたりを引き取って、その打ち傷を洗ってやった。そして、その場で自分も家族も、ひとり残らずバプテスマを受け、さらに、ふたりを自分の家に案内して食事のもてなしをし、神を信じる者となったことを、全家族と共に心から喜んだ。

\*\*\*\*\*

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

【 アリルイヤ 第8調 】

Musical notation for the first line of the hymn. The melody is on a treble clef staff with a key signature of one flat (B-flat). The notes are: G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), C5 (quarter), D5 (quarter), E5 (quarter), F5 (quarter), G5 (quarter). The lyrics below are: ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

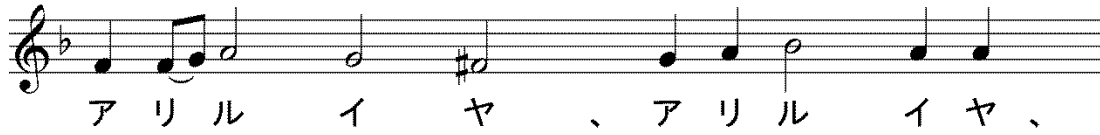
Musical notation for the second line of the hymn. The melody is on a treble clef staff with a key signature of one flat (B-flat). The notes are: G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), C5 (quarter), D5 (quarter), E5 (quarter), F5 (quarter), G5 (quarter). The lyrics below are: ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>われ かえり</sup> 我を顧み、<sup>われ あわれ たま</sup> 我を憐み給え、

Musical notation for the first line of the hymn. The melody is on a treble clef staff with a key signature of one flat (B-flat). The notes are: G4 (quarter), A4 (quarter), Bb4 (quarter), C5 (quarter), D5 (quarter), E5 (quarter), F5 (quarter), G5 (quarter). The lyrics below are: ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



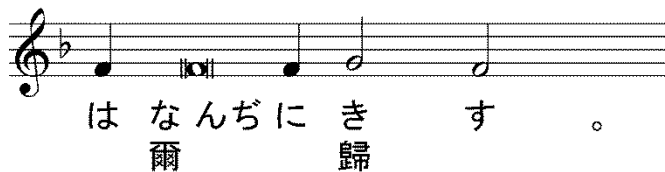
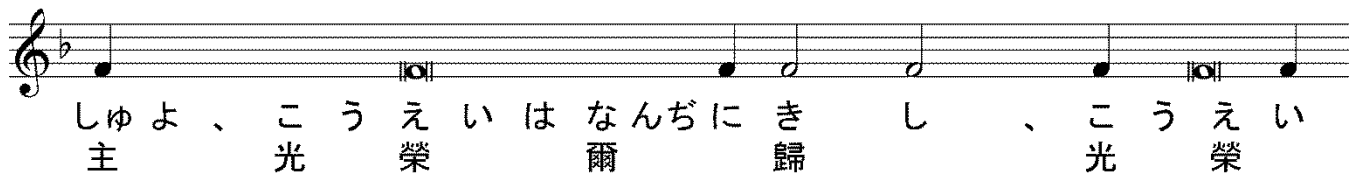
誦經) <sup>わ あし なんぢ ことば かた たま</sup>我が足を爾の言に固め給え、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) イオアン福音書 34 端 9 章 1 節～38 節 】

代禱) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup>イオアン傳の聖福音經の讀、



代禱) <sup>つし き</sup>謹みて聽くべし、

誦經) <sup>か と き ゆ う ま め し ひ ひ と み も ん と か れ と い ラ ヴ ィ</sup>彼の時イイスス行けるに、生れながら 警なる人を見たり。門徒彼に問いて曰へり、夫子、

<sup>こ ひ と め し い う ま こ た れ つ み え か れ そ も そ も そ の お や こ た</sup>斯の人の 警にして生れしは、是れ孰か罪を獲たる、彼か、抑 其親か。イイスス答え

<sup>い か れ つ み え そ の お や ま た し か す な は ち か れ お い か み わ ざ あ ら わ た め わ れ</sup>て曰えり、彼も罪を獲ず、其親も亦然り、乃 彼に於て神の作爲の 顯れん爲なり。我

<sup>な お ひ る あ い だ わ れ つ か わ も の わ ざ な よ る き た そ の と き た れ な あ た わ れ</sup>尚 晝なる間、我を 遣しし者の作爲を爲すべし、夜 來る、其時は誰も爲す能わず。我

<sup>よ あ と き よ ひ か り こ れ い ち つ ば き つ ば き も つ ど ろ な そ の ど ろ め し い</sup>世に在る時は、世の 光なり。之を言いて、地に 唾し、唾を以て泥を成し、其泥を 警

<sup>め ぬ こ れ い ゆ い け あ ら や く つ か わ</sup>の目に塗りて、之に謂えり、往きて、シロアムの池に洗え。(シロアム、譯すれば、遣され

<sup>もの か れ ゆ あ ら み え き た そ の と な り ひ と お よ さ き か れ め し い み</sup>し者なり。) 彼往きて洗い、見るを得て來れり。其 隣の人及び先に彼が 警なるを見し

<sup>もの い こ ぎ こ も の あ ら あ る ひ と い こ れ か れ あ る ひ と い か れ に</sup>者曰えり、此れ坐して乞いし者に非ずや。或 曰えり、是は彼なり、或 曰えり、彼に似

<sup>もの か れ い こ れ わ れ か れ ら こ れ い なん ぢ め い か ひ ら</sup>たる者なり、彼は曰えり、是は我なり。彼等之に謂えり、爾の目は如何にして啓けたるか。

かれこた い な ひと どころ な わ め ぬ われ い  
彼 答えて曰えり、イイススと名づくる人、泥を成して、我が目に塗りて、我に謂えり、シロア  
ムいけ ゆ あら われゆ あら み え かれらい そのひとづく あ いわ  
の池に往きて洗えと、我往きて洗いて見るを得たり。彼等曰えり、其人安に在るか。曰  
くわれし こ めしい もの ら たづさ いた どころ な そのめ  
、我知らず。此の警たりし者をファリセイ等に攜え至る。イイススが泥を成して、其目  
をひら ひ スポタ ら またそのいか み え と こた い  
啓きし日は、安息日なり。ファリセイ等も亦其如何に見るを得たるを問いたれば、答えて曰え  
りどころ われ め お われあら み え ら うち あるものい こ ひと  
、泥を私の目に置き、我洗いて見るを得たり。ファリセイ等の中の或者曰えり、斯の人は  
かみ あら スポタ まも た ものい つみ ひと いくん か ごと  
神よりするに非ず、安息日を守らざればなり。他の者曰えり、罪ある人は安ぞ是くの如  
ききせき おこな え ここ おい かれら うち ふんろん まためしい い なんぢ かれ こと  
奇蹟を行ふを得ん。是に於て彼等の中に紛論ありき。復警者に謂う、爾は彼の事  
におい なに い けだしかれ なんぢ め ひら いわ こ よげんしゃ じん  
於て何を言わんか。蓋彼は爾の目を啓きたり。曰く、是れ預言者なり。イウデヤ人  
はそのもとめしい のち み え しん こ み え もの ふたおや よ いた  
其素警にして、後に見るを得たるを信ぜずして、此の見るを得たる者の二親を呼び至ら  
しむるま これ と い こ なんぢら こ なんぢら めしひ うま い もの  
を待ちて、之に問いて曰えり、此れ爾等の子、爾等が警にして生れたりと曰う者な  
るかいまいか み そのおやかれら こた い こ わ こ またそのめしい  
、今如何にして見るか。其親彼等に答えて曰えり、此れ我が子なること、亦其警にし  
てうま われらこれ し しか いまいか み われらこれ し あるい  
生れたることは、我等之を知る、然れども今如何にして見るか、我等之を知らず、或は  
たれ そのめ ひら われらし かれ としちょう かれ と みづか おのれ こと かつ  
誰か其目を啓きしを我等知らず。彼は年長ぜり、彼に問うべし、自ら己の事を語ら  
ん。おや か い じん おそ よ けだし じんすで あいはか  
親の斯く言いしは、イウデヤ人を懼れしに因りてなり、蓋イウデヤ人已に相謀りて、  
も ひとかれ みと かいどう しりぞ さだ こ ゆえ そのおや  
若し人彼をハリストスと認めば、會堂より黜けらるべしと定めたり。是の故に其親は、  
かれ としちょう かれ と い ここ おい めしい ひと ふたたびよ これ い  
彼は年長ぜり、彼に問うべしと曰えり。是に於て警たりし人を再呼びて、之に謂え  
りこうえい かみ き われら こ ひと ざいにん し かれこた い そのざいにん  
、光榮を神に歸せよ、我等は斯の人の罪人たるを知る。彼答えて曰えり、其罪人た  
りやいな われこれ し ただひとつ こと し すなわち われもとめしい いま み また  
否や、我之を知らず、唯一の事を知る、即ち我本警たりしに、今は見る。又  
これ い かれ なに なんぢ な いか なんぢ め ひら こた い われすで  
之に謂えり、彼は何を爾に爲ししか、如何にして爾の目を啓きし。答えて曰えり、我已  
になんぢら い しこう なんぢらき なん またき ほつ あになんぢら かれ もん  
爾等に言えり、而して爾等聴かざりき、何ぞ復聞かんと欲する、豈爾等も彼の門  
と な ほつ かれらこれ のし い なんぢ そのもんと われら もんと  
徒と爲らんと欲するか。彼等之を語りて曰えり、爾は其門徒、我等はモイセイの門徒な  
りわれら かみ かつ し しか こ ひと いく し そのひとこた  
。我等は神がモイセイに語りしを知る、然れども斯の人の奚れよりするを知らず。其人答  
えてかれら い これ あや こと なんぢら か いづれ し しか かれ わ  
彼等に謂えり、此は奇しき事なり、爾等は彼の奚れよりするを知らず、然るに彼は我  
がめ ひら われら かみ ざいにん き し しか も ひとかみ うやま そのむね  
目を啓きたり。我等は神が罪人に聴かざるを知る、然れども若し人神を敬い、其旨を



おこな こひと きよ はじめ このかた いま ひと うまれ めしひ もの め ひら  
 行はば、斯の人に聴く。世の始より以來、未だ人の生ながら 警なる者の目を啓き  
 しを聞かざりき。若し、斯の人 神よりせしに非ずば、何事をも 行 うを得ざりしならん。彼等  
 これ こた い なんぢ まった つみ うち うま しこう なんぢわれら おし つい  
 之に答えて曰えり、爾は全く罪の中に生れたり、而して 爾我等を教うるか。遂に  
 かれ そと お いだ そのかれ お い き かれ あ い なんぢかみ  
 彼を外に逐い出せり。イエスは其彼を逐い出だししを聞いて、彼に遇いて曰えり、爾神  
 こ しん かれこた い しゆ こ たれ わ かれ しん ため  
 の子を信ずるか。彼答えて曰えり、主よ、是れ誰なるか、我が彼を信ぜん爲なり。イエス  
 これ い なんぢすで かれ み かつなんぢ かた もの これ きれい しゆ われしん  
 ス之に謂えり、爾已に彼を見たり、且爾と語る者は是なり。彼曰えり、主よ、我信  
 すなはちかれ はい  
 ず、乃彼を拜せり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスが道をとおっておられるとき、生れつきの盲人を見られた。弟子たちはイエスに尋ねて言った、「先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」。イエスは答えられた、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならぬ。夜が来る。すると、だれも働けなくなる。わたしは、この世にいる間は、世の光である」。イエスはそう言って、地につばきをし、そのつばきで、どろをつくり、そのどろを盲人の目に塗って言われた、「シロアム (つかわされた者、の意) の池に行つて洗いなさい」。そこで彼は行つて洗つた。そして見えるようになって、帰つて行つた。近所の人々や、彼がもと、こじきであつたのを見知つていた人々が言つた、「この人は、すわつてこじきをしていた者ではないか」。ある人々は「その人だ」と言い、他の人々は「いや、ただあの人に似ているだけだ」と言つた。しかし、本人は「わたしがそれだ」と言つた。そこで人々は彼に言つた、「では、おまえの目はどうしてあいたのか」。彼は答えた、「イエスというかたが、どろをつくつて、わたしの目に塗り、『シロアムに行つて洗え』と言われました。それで、行つて洗うと、見えるようになりました」。人々は彼に言つた、「その人はどこにいるのか」。彼は「知りません」と答えた。人々は、もと盲人であつたこの人を、パリサイ人たちのところにつれて行つた。イエスがどろをつくつて彼の目をあけたのは、安息日であつた。パリサイ人たちもまた、「どうして見えるようになったのか」、と彼に尋ねた。彼は答えた、「あのかたがわたしの目にどろを塗り、わたしがそれを洗い、そして見えるようになりました」。そこで、あるパリサイ人たちが言つた、「その人は神からきた人ではない。安息日を守っていないのだから」。しかし、ほかの人々は言つた、「罪のある人が、どうしてそのようなしるしを行うことができようか」。そして彼らの間に分争が生じた。そこで彼らは、もう一度この盲人に聞いた、「おまえの目をあけてくれたその人を、どう思うか」。「預言者だと思います」と彼は言つた。ユダヤ人たちは、彼がもと盲人であつたが見えるようになったことを、まだ信じなかつた。ついに彼らは、目が見えるようになったこの人の両親を呼んで、尋ねて言つた、「これが、生れつき盲人であつたと、おまえたちの言つているむすこか。それではどうして、いま目が見えるのか」。両親は答えて言つた、「これがわたしどものむすこであること、また生れつき盲人であつたことは存じています。しかし、どうしていま見えるようになったのか、それは知りません。また、だれがその目をあけて下さつたのかも知りません。あれに聞いて下さい。あれはもうおとなですから、自分のことは自分で話せるでしょう」。両親はユダヤ人たちを恐れていたので、こう答えたのである。それは、もしイエスをキリストと告白する者があれば、会堂から追い出すことに、ユダヤ人たちが既に決めていたからである。彼の両親が「おとなですから、あれに聞いて下さい」と言つたのは、そのためであつた。そこで彼らは、盲人であつた人をもう一度呼んで言つた、「神に栄光を帰するがよい。あの人罪人であることは、わたしたちにはわかっている」。すると彼は言つた、「あのかたが罪人であるかどうか、わたしは知りません。ただ一つのことだけ知つています。わたしは盲であつたが、今は見えるとい

うことです」。そこで彼らは言った、「その人はおまえに何をしたのか。どんなにしておまえの目をあけたのか」。彼は答えた、「そのことはもう話してあげたのに、聞いてくれませんでした。なぜまた聞こうとするのですか。あなたがたも、あの人の弟子になりたいのですか」。そこで彼らは彼をののしって言った、「おまえはあれの弟子だが、わたしたちはモーセの弟子だ。モーセに神が語られたということは知っている。だが、あの人がどこからきた者か、わたしたちは知らぬ」。そこで彼が答えて言った、「わたしの目をあけて下さったのに、そのかたがどこからきたか、ご存じないとは、不思議千万です。わたしたちはこのことを知っています。神は罪人の言うことはお聞きいれになりませんが、神を敬い、そのみこころを行う人の言うことは、聞きいれて下さいます。生れつき盲であった者の目をあけた人があるということは、世界が始まって以来、聞いたことがありません。もしあのかたが神からきた人でなかったら、何一つできなかつたはずです」。これを聞いて彼らは言った、「おまえは全く罪の中に生れていながら、わたしたちを教えようとするのか」。そして彼を外へ追い出した。イエスは、その人が外へ追い出されたことを聞かれた。そして彼に会って言われた、「あなたは人の子を信じるか」。彼は答えて言った、「主よ、それはどなたですか。そのかたを信じたいのですが」。イエスは彼に言われた、「あなたは、もうその人に会っている。今あなたと話しているのが、その人である」。すると彼は、「主よ、信じます」と言って、イエスを拝した。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸 す。

※代式祈祷③ へ